

子どもたちの期待する親の在り方
—小学校4年生と6年生—

池 山 和 子・河 津 花 菜

(2006年10月18日 受理)

What Parents Should be That Children Expect
—In the Case of 4th and 6th Children—

I KEYAMA Kazuko・KAWAZU Kana

Abstract

The purpose of this paper is to investigate the ideal image children have of parents.. In a questionnaire was asked children to imagining how they would be as a parents in the future. The questionnaire consisted of three parts : when he/her would be a parent, (1) how they would be as parents, (2) what they would think important in child rearing, (3) how they would behave in situations which occur daily in Japanese home. The subjects are 778, children in the 4th and 6th years of three elementary schools in Kagoshima-city. The survey was conducted September and October year 2000. The main results of the survey were : the largest number of answers to (1) was "a parent who thinks greatest deal of their family", (2) "teaching good from evil", (3) between boys' and girls', and between 4th and 6th, there were many significant differences, but (4) among birth order, and family structure, there were few significant differences. We conclude that parents should have live up to their 4th grader children's expectation when he/she ask daily care and an emotional sympathy among families but parents should give weight gradually to, independence to their the 6th grader children..

キーワード : 家庭教育, 子どもの期待, 親像, クラスタ分析

始めに

青少年の問題行動として、近年は家庭内暴力の報道は減ってきているがこのところ親の殺人のニュースが続けて報じられている。家族、特に親を死に至らせるという行動は共感が難しく理不尽さが不安感をも呼び起こす。このような現象への解釈や解説はマスコミなどでも様々なものが流されるが、深層心理学の立場から、河合は子どもにとって周囲の大人、特に親が心理的にも子どもを暖かく抱きしめようとする行為が子どもにとっては自分の育ちや立ち立ちへの行動を阻むものとして強く感じられてしまうことがあり、そのような場合にその感情が本人も制御できない凶暴な力となりうることを述べている⁽¹⁾。人間関係は意識以外の要因にも大きく影響されるが、親自身の現実の在り方と親が自身に関して考えている親像と子どもの目に見える親像とはそれぞれ3様に異なることは夙に指摘されておりそれぞれの像を捉えようとする検査法も開発されている⁽²⁾。子どもにとって親の教育や指導、関わりはその時々ではうるさく感じられるものにせよ、ある程度の発達段階に至れば家族員の自分への愛情の表れとして理解できるようになり、場合によっては叱るべきときに叱られないことは不満さえ感じられるようになると考えられる。家庭の教育力の低下が言われているが、親のあるべき姿として子ども自身はどのような期待を持っているかについては調査の集積が少ない⁽³⁾。このような期待は子どもの成長に伴って、他者である親の立場を理解できるようになり、より現実的なものへと変化していくと考えられる。

本研究は、子どもたちが親の在り方や子育ての在り方としてどのようなものを望ましいと考えているかについて、将来の展望が意識され始めると考えられる小学校の6年生と発達の比較の意味で4年生児童を対象に質問紙によって調査したものである。

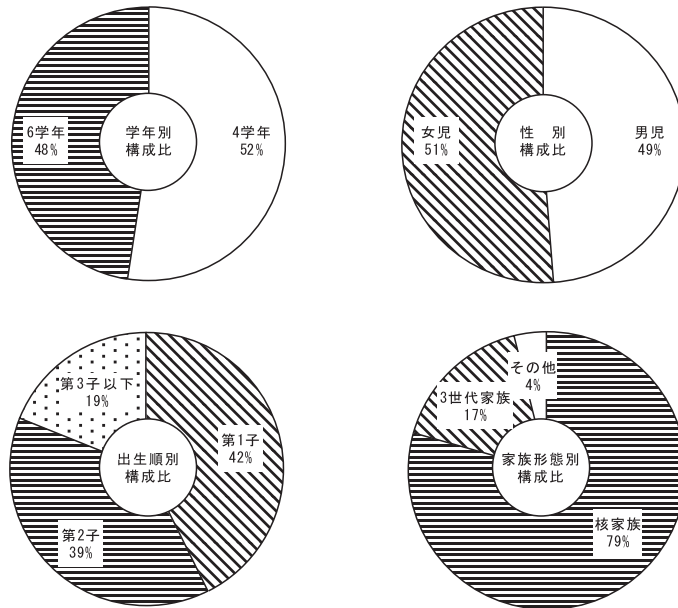
方法

鹿児島市内の4小学校に依頼して児童を対象の質問紙調査を行った。ほぼ北部、南部、中心に近い地域と全体に散らばるような位置の学校4校の4年生と6年生778名を対象として依頼した。得られた調査対象とその属性について表1と図1に示す。回収率は96.7%であった。

表1 学校、学年、性別 対象児

	4年			5年			6年		
	男児	女児	不明	男児	女児	不明	男児	女児	不明
A小学校	48	50	0	57	64	2	105	114	2
B小学校	17	20	0	23	14	2	40	34	2
C小学校	29	32	3	—	—	—	29	32	3
D小学校	88	102	5	98	96	2	186	198	7
小計	182	204	8	178	174	6	360	378	14
計	394			358			752		

回収率 96.70%



第1図 対象の属性(学年, 性, 出生順, 家族形態, 別割合)

調査時期は2000年10月から11月にかけてである。調査内容は、大きく3つの質問群から成り、はじめの2群は、親、子育ての際大事にしたいことのそれぞれについて、具体的な項目を挙げ、それぞれについて三段階評定（ぜひ・必ず、できれば、それほどでない）で回答を求めた。第3群の質問として日常的に親子の葛藤場面として生じがちと考えられる、例えば子ども部屋への親の出入りなどの9の場面について、自分が親となった時具体的な対応の仕方を選択肢の中から回答を求めた。全体に現在の親への不満や要望にならないよう、「将来あなたがもし親になるとしたらこんな親になりたいと思う夢を、本当になれるかどうかはわからないけれども、良いなと思う理想の姿を考えて教えてください」として、回答を求めた。

結果

(1) 児童が望ましいと描いている親の姿

児童がなりたい親としては、「家族に不自由をさせないだけのお金をたくさん持っている親」などの12項目を挙げたが、「がんばってぜひなりたい親」の選択が最も多かった項目は「家庭をなにより大切にして、家族にやさしい親」532名70.7%（この項目に対する「それほどなりたいと思わない」の選択数12名1.6%で最も少ない。）であり、逆に「がんばってぜひなりたい」の選択が低く「それほどなりたいと思わない」の選択が多かったものは「世間の人からえらい、立派だと言われる社会的地位の高い親」で「がんばってぜひなりたい」69名9.2%、「それほどなりたいと思わない」335名44.5%であった。子どもを育てるときに大切にしたいこととして「家族が明るく楽しく過ごせるようにする」など35項目を挙げたが「必ず大切にしたい」の選択が最も多かったものは「して

良いことと悪いことをきちんと教える」で679名90.3%の児童が選択しており（「それほど大切にしない」の選択者は6名0.8%であった。）、逆に選択の少なかった項目は「子どもが欲しいと言うものは何をおいても手に入れる」47名6.3%でありこの項目に対しは「それほど大切にしない」との回答も最も多く344名45.7%であった。この年齢の児童では親の機能として社会規範を教えることを重要視しており、子どもの要望をそのまま受入れることは必ずしも良いではないとの判断もできるようになっていると考えられる。これらの質問項目それぞれについて、児童の学年別、性別、出生順、家族形態別によるクロス集計を行った。出生順別と家族形態別のクロス集計においては有意な差がみられた項目が少なかった。学年別と性別の有意差の現れ方を表2と表3に示す。6年生でよりなりたい、大切にしたいとの回答が4年生との間で有意に差のあったものは、「周りの人たちと仲良く付き合いみんなから好かれている親」（ $\chi^2=26.26$ df=2 p<0.001）「家族とは別に生きがいをもって生き生きとしている親」（ $\chi^2=30.81$ df=2 p<0.001）「子どもがしたいということはできるだけ自由にさせる」（ $\chi^2=18.42$ df=2 p<0.001）「きょうだいや友達と比べることはしない」（ $\chi^2=17.77$ df=2 p<0.001）「悪いことや間違ったことを見て見ぬふりをしないようにさせる」（ $\chi^2=6.96$ df=2 p<0.05）があり、社会的な視点や家族員の個別な主体性に気付き始めている様子が見られる。

表2 なりたい親像の学年別と性別有意差

	学年別	性別
家族に不自由させないだけのお金をたくさん持っている親		
世間の人からえらい、立派だと言われる社会的地位の高い親		*** b
他の人から何をいわれようと自分の信じることをする親	*** 4	
周りの人たちと仲良く付き合いみんなから好かれている親	*** 6	** g
家族を何より大切に家族に優しい親		
家事や子どもの身の回りの世話などをきちんとする親		*** g
任された仕事は他の何よりも大切にできちんとする親		
何より神様や仏様を大切にする親	*** 4	
いつも勉強し物事を深く考えいろいろなことをよく知っている親	*** 4	
知らない人にもやさしく思いやりのある親		*** g
いつも明るく少しいやなことがあっても前向きに生きている親		* g
家族とは別に生きがいをもって生き生きとしている親	*** 6	

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001 4,6：強い傾向の学年 b (boy), g (girl)：強い傾向の性別

表3 子どもを育てるときに大切にしたいことの学年別と性別の有意差

	学年別	性別
家族が明るく楽しく過ごせるようにする		*** g
子どもが欲しいと言うものは何をおいても手に入れる	*** 4	
子どもの身の回りは親がこまめに動いて清潔にする		
勉強をしっかりとるように注意、指導する	*** 4	
子どもがしたいということはできるだけ自由にさせる	*** 6	** b
子どもが甘えたいときはいつでも甘えさせる	* 4	
きょうだいや友達と比べることはしない	*** 6	
あいさつや礼儀をきちんとできるように教える		
食事や子どもの身の回りの物はできるだけ手作りにする	*** 4	*** g
子どもが話しかけてきた時はできるだけ話し相手になる		*** g
子どもの誕生日などの家族の行事を大切にする		
自分のことは自分でするようにしっかり躾ける		
子どものことはできるだけ放っておいて自分でなんでもさせるようにする		
親の気持や考えをできるだけ子どもにも伝える		
して良いことと悪いことをきちんと教える		
良い学校に入って良い職業につけるよう親が考えてそのようにさせる	*** 4	** b
人には思いやりをもって親切にするようにさせる		*** g
正しいと思うことは、人に何か言われてもやり抜くようにさせる	** 4	
親が子どものお手本となるようにいつも心掛けて行動する		* g
悪いことや間違ったことを見て見ぬふりをしないようにさせる	* 6	
あまり面倒なことには巻き込まれないようにさせる	* 4	
家族の中でけんかをしないようにする	** 4	
子どもの夢を大切に叶えられるように協力する		
親の経験から人として生きていく上で大切なことを子どもに教えていく	*** 4	*** g
近所の人や友達とはできるだけ仲良くするよう教える		
親や大人の言いつけたことや決めたことは素直に守るようにさせる	*** 4	
子どもと約束したことは親も守る		
できるだけ子どもと一緒に遊ぶよう心掛ける		
食事は必ず家族全員揃って食べるようにする		** g
子どもや家族でできるだけ話す時間をつくる		*** g
直接注意したり構ったりしないがいつも子どもの様子を見守っている		
学校や子どもの地域の行事にはできるだけ参加するようにする	*** 4	** g
学校の先生と親が親しくして話をよくするようにする	*** 4	
叱るよりも良いところをほめて育てる		
ほめるよりも悪いところをきちんと叱って育てる		** b

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001 4,6 : 強い傾向の学年 b (boy), g (girl) : 強い傾向の性別

(2) 質問群「育てるときに大切にしたいこと」の回答に基づくグルーピング

「子どもを育てるときに大切にしたいこと」として挙げた35項目質問回答を数量化理論Ⅲ類によりスコアを出しクラスター分析(K-mean法)によって、対象児童のグルーピングを試みた。グループの人数にあまり大きく偏りが無いよう取り上げる項目を調整した。各項目の数量化三類による三つの軸のスコアを表4に示す。このスコアからI軸は、プラス方向は、地域との関わりを重んじる傾向、マイナス方向は、家族内で個人の資質を高めることを重んじる傾向の軸と解釈した。II軸は、プラス方向は、独り立ちへの方向を重んじる傾向に対してマイナス方向は、情緒的な接触を重んじる傾向の軸、III軸はプラス方向は指導者としての親を重んじる傾向、マイナス方向は家族の共通体験を重んじる傾向と解釈される。

クラスター分析によってできたグループの各軸のスコアの特徴を表5に示す。この表からグループAは、個人的な資質、独り立ちへ方向、家族の共通体験を重んじる傾向の高いグループとして、グループBは、地域との関わり、情緒的接触、家族の共通体験を重んじるグループ、グループCは、地域との関係、独り立ちへの方向と親の指導的な役割を重んじるグループ、グループDは、個人の資質、情緒的な接触、親の指導的役割を重んじるグループと解釈される。

表4 数量化Ⅲ類によるスコア

項 目	I 軸	II 軸	III 軸
家族がいつも笑いを絶やさず明るく楽しく過ごせるようにする	-0.5247	-1.0970	0.2238
あいさつや礼儀をきちんとできるように教える	-0.7894	0.2212	-0.2852
子どもが話しかけてきた時はできるだけ話し相手になってあげる	0.1304	-0.7061	-0.4181
子どものお誕生日などの家族の行事を大切に	-0.6952	-1.1592	0.1475
自分のことは自分でするようにしっかりしつける	-1.0325	3.1446	-1.4052
して良いことと悪いことをきちんと教える	-0.9441	-0.4931	-0.1558
人には思いやりをもって親切にするようにさせる	-0.2275	0.0861	-0.0227
親が子どものお手本となるようにいつも心がけて行動する	0.7153	0.5057	2.7890
悪いことや間違っただけを見て見ぬふりをしないようにさせる	-0.6879	0.4932	-0.8949
子どもの夢を大切にできるだけ叶えられるように協力する	0.4541	-0.1225	0.8177
親の経験から人として生きていく上で大切なことを子どもに教えていく	0.3963	1.8327	2.1643
近所の人や友達とはできるだけ仲良くするように教える	-0.9675	-0.5337	-0.0084
子どもと約束したことは、親も守る	0.2250	-0.2742	0.0027
できるだけ子どもといっしょにあそぶように心がける	1.9606	-0.1404	-1.3748
子どもや家族でできるだけ話す時間をつくる	1.9206	-0.2633	-0.3312
学校や子どもの地域の行事にはできるだけ参加するようにする	2.2844	0.2041	-1.1704

表5 クラスター分析(K-mean法)によるグループ化と各グループの特徴

	グループA (n=174)	グループB (n=69)	グループC (n=395)	グループD (n=105)
I 軸	-	+	+	-
II 軸	+	-	+	-
III 軸	-	-	+	+

(3) 学年別と性別の親への期待の傾向

(2)で作成したグループの構成比の学年別と性別による比較をクロス集計と χ^2 検定と残差分析によって行った。結果を図2、表6と図3、表7に示す。6学年では、4学年に比べてグループAが有意に多く、グループCが有意に少ない。学年が高くなると地域との関わりや家族の共通体験よりも個人の資質や独り立ちの方向や親の指導的役割を大切にしている傾向が生じてくると考えられる。性別では、男児でグループA、C、Dが有意に多く、女児に比べて家族の共通体験よりも親の指導的役割を重んじる傾向がみられる。

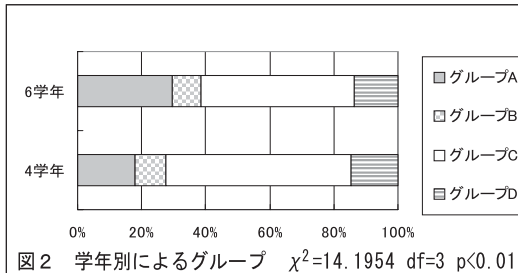
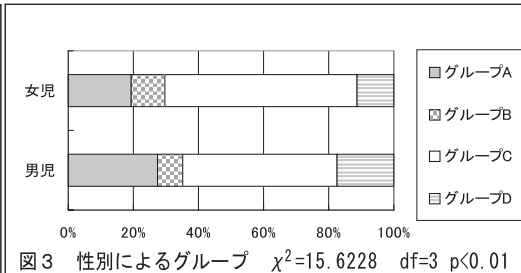
図2 学年別によるグループ $\chi^2=14.1954$ $df=3$ $p<0.01$ 図3 性別によるグループ $\chi^2=15.6228$ $df=3$ $p<0.01$

表6 残差の表 学年によるグループ

	グループA	グループB	グループC	グループD
6学年	3.701**	-0.198	-2.748**	-0.398
4学年	-3.701**	-0.198	2.748**	-0.398

**, $p<0.01$

表7 残差の表 性別によるグループ

	グループA	グループB	グループC	グループD
男児	2.614**	-1.257	-3.095**	2.285*
女児	-2.614**	1.257	3.095**	-2.285*

* $p<0.05$, ** $p<0.01$

まとめ

思春期は疾風怒涛の時代と言われるが、小学校6年生は思春期の入り口である。大人へと成長していかなければならない自覚も芽生えてくる時期であり、子ども自身もなかなか安定していることは難しいとされる。本調査では、自分が親になった時の夢という言い方で小学4年生と6年生に問いかけたが、この回答は子どもが親へどのような期待をしているか、あるべき姿と描いている像を示していると解釈できる。本調査の結果から、思春期へ向かう時期に子どもは、親に対して指導的な役割を取って個人の資質を高めながら独り立ちへの傾向を尊重することが望ましいと考えるようになる結論づけられる。この傾向は女子よりも男子で強いと考えられる。ただし4年生においては、家族内での情緒的な接触や共通体験、親の細やかな家族員への世話などを望んでいることを忘れてはならない。子どもは成長・発達と共に、親へと期待する親像も変化する。当然と言えば当然

であるが、こうした子どもの成長発達段階とその時に応じて子どもの求める親役割を遂行することが青少年問題の解決にも期待される。

謝辞

本調査に快くご協力下さいました各小学校の校長先生を始めとする先生方、また、調査用紙にていねいに回答下さいました児童の皆様に深く感謝いたします。

引用参考文献

- (1) 河合隼雄 大人になることのむずかしさ 岩波書店 1999
- (2) 野呂正 発達心理学 放送大学教材 1994
- (3) 小嶋謙四郎他 小児の臨床心理検査法 医学書院 1973
- (4) 江口季好 私はこんな家庭がほしい—詩・作文に見る子どもの願い— 児童心理 37(8) pp110-116
- (5) 指定都市教育所連盟編 子どもがとらえた教育環境 東洋館出版社 2000
- (6) 猪野郁子 堀江鈴子 両親像について(2)—大学生の捉える父親の現実像と理想像—島根大学教育学部紀要(人文・社会科学) 第28巻 1994 pp9-15
- (7) 伊藤隆二 子どもにとって家庭とは 福村出版 1995
- (8) 松田醒編 家族関係と子ども 新児童心理学講座第12巻 金子書房 1991
- (9) 教育基礎情報調査会編 家庭教育・しつけ 教育アンケート集録年鑑1986年版第2巻 主婦の友社 1986
- (10) 子どもの調査研究所編 子どもの調査資料集成 1974